

「出身学校・出身塾へ感謝の手紙を送ろう」という授業実践

—私学としての教科と校務分掌の両立—

樟蔭中学校高等学校 教諭 船田 智史

funada.satoshi@osaka-shoin.ac.jp

キーワード：技術、生徒募集、手紙、コミュニケーション

1. はじめに

教科によっては、実習授業のカリキュラムの中で創作活動をし、生徒作品として表現できるものが多く存在する。芸術・美術・習字の分野や技術・情報の分野などは、生徒作品としての成果物が得られる実習授業の形態を持つ。

特に中学校「技術」の新学習指導要領では、コンピュータの基本操作習得が小学校段階に移され、これまでの「技術とものづくり」「情報とコンピュータ」の2構成から、「A 材料と加工に関する技術」「B エネルギー変換に関する技術」「C 生物育成に関する技術」「D 情報に関する技術」の4構成になった。これは、社会の中で活用される技術を意識した構成で、相手や社会を意識した学びの仕掛けをし、社会を意識した作品の制作の必要性として読み取れる。

一方、近年では、私立学校において、いわゆる「入口」である生徒募集は、「出口」の進路指導と同様に重要な校務分掌の1つとしてあげられている。学校によっては、その生徒募集を担当する教員たちは、勤務校の実態やカリキュラム・進学指導の内容や将来的な展望・ビジョンから生徒食堂のメニューに至るまで、学校の広報活動の一環としてすべてを認識したうえで、学校外に向けて広報活動をしていかなければならない。その中でも、学校独自で作られる学校案内パンフレットなどの広報アイテムは、その学校の様子を知るのに必須のハンドブックである。しかし、一般的なパンフレットには実際に通学している在学生の様子を細かく表現することは難しく、説明に苦勞することが多いことは確かである。また、学校行事の写真集や進学状況の一覧表なども附則の資料として作成されている学校も多く見受けられるが、学校の中での個々の生徒の姿を鮮明に表現しているかという疑問が残る。

そこで、実際の教科の授業の中で創作される生徒作品が成果物の形になって表現できるものを、今までの形の広報アイテムと併せてそれを学校広報の枠組みに取り入れ、在校生の成長の様子を出身学校の先生や地域の方々に知らせていく実践を技術科として行ったので報告する。

- 対象：中学1年生全員
- 教科：中学生「技術」
- 時期：1学期（4月～6月）
- テーマ：中学受験をして入学してきた生徒が、卒業してしばらく会っていない出身学校や塾の恩師に対し、本校に入学できたことの喜びや感謝の気持ちを伝える手紙を、パソコンを使って作成すること。

- 広報アイテム：その手紙を教員自らが、実際に相手先の出身校や塾に訪問して配達し、届けるところまでを実践する。

2. 実践授業の概要

(1) 教科として

本校では、中学1年生において「技術」が、週1時間の授業時間数で配当されている。

<授業計画>

第1時：ガイダンス、テーマ・趣旨説明

- ・出身塾や出身小学校の先生へ1枚作成する。
- ・手紙については、本校教師がその内容を見ることがあることを前提に書く。

第2時：手紙文の書き方（ひな形）説明

- ・自分の名前、出身学校名、先生のお名前
- ・生徒本人の写真
- ・お世話になった先生へのメッセージ、現在の様子と今後の目標

第3時：「感謝の手紙」の下書き

- ・手書きで、縦書き原稿用紙に埋める作業をする。

第4時：マイクロソフト「WORD」の使い方説明、デジカメの操作実習

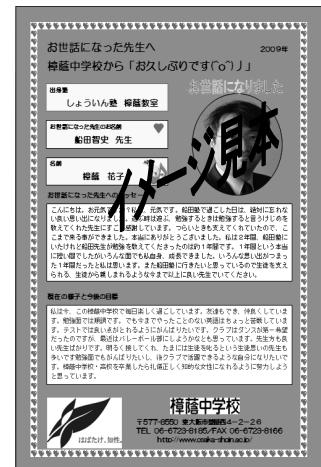
- ・ページ罫線、図の挿入、クリップアート、ワードアートなどの説明
- ・デジカメでお互いに生徒の写真を撮影し、USB接続でPCに取り込む。

第5時：マイクロソフト「WORD」で手紙文の制作

- ・生徒写真の画像貼り付け・加工
- ・文章の打ち込み、加工

第6時：ラミネート加工の実習

- ・校正
- ・桃色用紙にカラー印刷（図は見本）



(2) 校務分掌として

生徒作品（感謝の手紙）がほぼ完成した7月以降に各作品を宛先別（小学校・塾など）に振り分けて、各地域担当の入試広報（生徒募集）委員の先生に手渡される。

7月から9月にかけて、本校の教師が学校の広報用ツールとして、各訪問先に配達をし、生徒募集活動を行う。入学したその生徒の近況報告と併せて、学校生活の様子も説明する。ただし、遠距離などの理由で、入試広報委員が直接訪問をすることが不可能な場合は、手紙を郵送した。

3. 評価

以下の点において、評価できたと言える。

- 私立学校であるために、受験生の居住地がかなり広範囲にわたっており、様々な小学校から入学してくる現状がある。今回の授業で、入学当初にもっている生徒の基本的コンピュータスキルの確認ができ、その上で、「伝えたい気持ちを正しく発信すること」への情報リテラシーの指導に転換することができた。
- 伝達媒体として電子メールやケータイを用いるのではなく、あえて「手紙」というメディアを使用することで、正しい言葉遣いや目上の人への適切な文章表現の習得を目指すことができた。また、電子メールとの違いを明らかにして、情報伝達媒体の選択の重要性を認識させることもできた。
- 送付相手に手紙を渡すことによって、相手からの返事も十分に期待ができた。実際に、相手からの返答には、郵便の手紙、メール、ケータイなど、様々な媒体を使用されたことが生徒の聞き取り調査でわかった。
- パソコンを使った手紙をカラー印刷で仕上げ、ラミネート加工することで立派に見せることができた。
- 学校内の様子をその生徒の実体験として語ってくれる学校用広報ツールとして利用できることが証明された。
- 単年度ではなく、継続していくことで、学校の信頼感も増すことができ、私立学校として在校生1人1人の面倒見のよさをアピールすることができた。
- 出身学校・塾の先生方が、実際に私立学校を勧める際には、公立学校にはない極め細やかな指導に期待していることはあきらかである。特に、教子が私立学校でどのように学校生活を過ごしているのかは、非常に気になる部分であることは間違いない。その点からも、生徒1人1人の声を手紙にのせて、生徒たちの言葉で伝えるという試みは、十分に効果的であると言える。

4. 課題と対策

以下の課題も浮かび上がってきた。

- 学校の入試広報の立場からは、出身学校や塾へのツールとしてこの手法は有効ではあるが、生徒の立場からすると、塾や出身学校で様々な体験を経て、入学している生徒も増えつつある。中には、「感謝

」という気持ちを、出身学校の恩師に持てずにいる生徒もいる。感謝の気持ちを言葉で表現することができないために入試広報委員が相手に持って行きにくいケースもあった。また、「感謝の気持ちを伝える」テーマでは、手紙を書きにくいことを訴える生徒もいた。

⇒ 授業としての立場と入試広報としてのスタンスに、折り合いをつけていながら、生徒の気持ちを優先して臨機応変に対応していくことが必要になってくると思われる。

- 実際に実践授業をする時期が、5月～6月であるのに対して、相手に届くのが7月後半から9月にかかることもあった。入学当初の気持ちを綴った手紙が2学期に届くこともあったために、手紙の内容がずれたものも生じた。

⇒ 今回は、生徒募集の担当教師数名で、配布・訪問活動を行ったために、中学生（110枚）を配り切るのに時間がかかってしまった。全校あげて、全教師で集中して短期間で完了を目指すべきであった。

- 「技術」という教科内での指導において、手紙という体裁を保ちつつ、手書きではなくパソコンを使用する制作物であったために、顔文字が多用されたり、話し言葉の羅列である生徒も少なからず見受けられた。

⇒ 想定していたことであったために、まずは、手書きで下書きをさせることにしたのであるが、「気持ちを伝える」というテーマのもと、情報伝達の媒体と同時に、表現方法の多様性には難しさを感じた。目上の方への手紙という設定であったが、生徒たちは手書きとIT機器活用との区別をするようである。また、塾や小学校の先生に対して、友達としての感覚でコミュニケーションをとることが当たり前になっている生徒もいた。

- 本授業実践では、技術科の授業で得られた成果物を、生徒募集で利用した。今後は、文章の表現という観点で国語科や、デザインを重視する美術科の協力を仰ぎながら、さらに発展性のあるものに上げていきたい。

5. 生徒の感想（原文掲載）

- 初めは恥ずかしかったけど、直接じゃ言えなかった気持ちも、手紙に書いたらきちんと自分の気持ちが言えました。

- 頑張って仕上げたときの達成感は今でも忘れられません。

- 塾の先生に届いたので電話がかかってきました。先生から「ありがとう」といってもらって、机にかざってもらっています。

- 一人の先生（塾を、退職した先生）とは、今現在文通をしています。これも感謝の手紙もおかげだと、思います。

- 私は、感謝の手紙を作って、感謝することの大切さを学びました。今まででいろんな人にささえられて、それを、感謝する気持ちを言葉にしてみても、とてもいい勉強になったと思います。これからも、感謝する気持ちを大切にしたいです。